

# 短 歌

わが庭の柿の若葉のさみどりが命の奔りを教えてくるる  
ほっておけばまたぞろそんな時代がくる「行つてきます」を「征きます」と言い  
鉄塔の上の鳶のピーヒョロロ空の高みに吸われてゆけり

犬山俊昭

(花舟短歌会)

しだれ咲く川面に揺れる一時の花盛りあげて川風にちる  
散りて又青葉若葉の色どりや空の高さも一際立ちぬ  
ひらひらと静かに季の落葉して道いつぱいに弾く足音

大澤清水

連日の熱帯夜に倦み見上げれば雲間にきりりと織月光る  
猛暑日の続きたるまま十六夜の月も熱もち涼風を恋う  
白秋の歌に出てくるセルの着物着るにふさわし十月夏日

小笹 岐美子

(湘南短歌会)

加藤 和彦  
(なぎさ短歌会)

筆執るも当てはまり無し「〇〇の候」令和七年酷暑の晩夏  
ピオトープ年々細る水嵩や生物多様果たせぬ人類  
敬老の祝い夫婦に届きしやグループホームに居りし妻にも

唐 沢 小夜子

絵手紙を送りたき人次々と浮かびたる日は秋日和の日  
ひとつ家事済む毎に吸う煙草死ぬまでやめぬ阿保ひとりかな  
「いいえさ場だろ」厨のひさし金柑をついばむ鳥でにぎわいており

木 村 恵 理

雪ふるる白く染まりし我庭の桜ふくらみ三分咲き見ゆ  
またねつてかわした言葉七日前逝去の知らせ永久の旅立ち  
琵琶の音と香のかほり立つ極楽寺三面香の聞香いそしむ

黒 田 良 子

亡き母の日記と化したうたに触れ我に始まる短歌への道  
寝付かれず夜の静寂を持て余す一首詠まんと見上ぐ星空  
「大丈夫」のひと言戻らぬ十年目生きてみますか戸惑いながら

鮫 島 美和子  
(なぎさ短歌会)

立春の運んでくれた幸せは黄色い蝶々ほどの明るさ  
白樺の芽吹き初めたる蓼科の静かな朝に鳥と目覚めぬ  
赤茶けた英和辞典の裏表紙に他人行儀に旧姓の吾

沢 田 昌 子  
(心の花湘南歌会)

浄智寺はシャガと躑躅の花ざかりすり減りし石段躓き登る  
亡き人の声想ひをり結界の杉生の上の高き青空  
裏山の細き階段登り行く澁澤龍彦の墓はいづこか

塩崎麗子  
(湘南藤沢短歌会)

青空に雲の一片溶けてゆく古都の山にも確かなる春  
毎日を食べ笑つて生き生きと九十半ばの叔母愛らしき  
折々に集めし和紙の一枚を透かせば見ゆる夕景の美し

鈴木通子  
(心の花湘南歌会)

水やれば初めて我に微笑みし友の花壇の千日紅の  
半月の今宵たわたわ揺れているおほろに浮かぶ花白き萩  
一花のみ近づきて来る他は失せて濃き紫のヘリオトロープ

高橋美津子

ホルター心電図付けダイケア看護師項目を計時してくるヒマワリ揺れて  
米寿近きに弟子にしてとう五十歳活気満ちおり遠き日頭ちくる  
月毎に道具いれかえる茶道男孫手伝いくるる授業にあるからと

高嶋とよ子  
(心の花湘南歌会)

振り向けばまだ砂浜に立ち尽くすひとりの姿夕日富士山  
「おはよう」とわれには聞こゆ快い目覚めに朝鳥通う日々  
チャツチャツ声を真似ればシーンとなる雑木林のホーホケキョー

竹中亮子

的確な助言とみごとな筆さばき師田先生に国会へたわが書  
店内の美しき料紙の匂ひたつ古今和歌二首散らしてみたし  
給湯器の故障にしどろもどろして今日の予定はどつと崩れる

田中依子  
(なぎさ短歌会)

吹き溜まるわくら葉の下頭をもたぐ露の新芽に朝の陽清し  
窓越しのしみじ葉いつしら色染めて夫看る日々の過ぎゆくを想ふ  
二人なら飛び越えられた水たまり今は一人でゆつくり渡る

田村孝子

小指ほど小さき西瓜庭先に黒き縞見え心浮き立つ  
姫烏頭や小さき花揺れ春を告ぐ人目に触れず密やかに咲く  
ダンボール抱えて友は風のごと土産のりんご数多置き去る

戸村忠子

(声楽調和道歌の広場)

それぞれに浴衣三味七重八重花火華やぐ江の島の宵  
明けの星輝くダイヤ煌めいて今日一日を照らし初めしか  
高々とひまわりの花猛暑にも燃ゆる金色元氣印に

豚汁

(藤沢翔陵高校)

仕事帰り夜明けを待つて恨み辛み曙までには傷癒す  
近づけば近づくほどに同心円一回だけでも抱きしめたい  
二人ぼっちいつも通りの一人よがりプラネタリウムで別れましょう

中川節子

小半年雪の中なる故郷は「道踏み」と言う方言残す  
雪の夜は祖母に抱かれて夜着の中「弥三郎婆さ」の語りねだりし  
節分を過ぎても雪は日々積る越後魚沼石打の里

橋田美恵子

(心の花湘南歌会)

難関の試験合格娘から告げられ嬉し正月祝う  
気持ちよく肌だし眠る乳飲み子へタオルお腹にわれはまもりて  
忘れぬ生きてしおれば今年は百歳母七十一歳でみまかりにけり

松浦みどり

(湘南藤沢短歌会)

嵩たかき紙の新聞ひろぐれば読みつくせぬまま冬日は暮れぬ  
芝草に紛れてはびこる雑草よ吾もさなりと可笑しみて引く  
手作りのピールに新茶雨の午後読みかけの本再び開く

三浦節子  
(花舟短歌会)

過またず秋分に咲いた彼岸花燃えたつように川辺に群れて  
早朝のラジオ体操に初参加ケヤキの下の枯れ葉踏みつゝ  
菜の花と濃い濃いピンクの桜花河津の春に今年も会える

森 睦子

わが庭に夕日浴びつつ水まけば空へと続く虹のかけ橋  
猛暑にも日増しに赤くミニトマトそよ風に揺れ夏を彩る  
コスモスの花咲き始めひとりじめ庭に佇み秋を満喫

山本澄子  
(九月会)

箱根路の旧街道に旅人の踏みけむ跡に病葉積もる  
七曲りしつつ登れる街道の石だたみの間の苔は色濃く  
茅ぶきの屋根の中にて夏ながら温きがよろし茶屋の甘酒

ユーカリユーカラ  
(花舟短歌会)

大國が台湾沖で威嚇した 嘘じゃないのだ四月一日  
しじま裂きソロに二重唱カノンまで軒が響く夜の病室  
辛いことありし日なりてもらいたる鱈のはらわた手間かけて抜く